

## 《論文》

## ハクストハウゼンとロシア論壇 —農村共同体をめぐって—

大矢 温

### はじめに

本論は、西欧派とスラヴ派との論争が始まる1840年代前半から農奴制改革が日程に上る1850年代後半に至るロシアの論壇における農村共同体をめぐる論争とプロシアの農学者、A. ハクストハウゼン (August Franz Ludwig Maria, Baron von Haxthausen-Abbtburg) の著作『ロシアの民族的生活の内的諸関係、特に農村諸制度の研究』(以下『農村諸制度の研究』と略称) との関係を明らかにしようとするものである<sup>1</sup>。

ハクストハウゼンはニコライ一世政府の資金援助を受けて1843年から1844年にかけてロシア各地を廻り、ロシアの農村社会の現状を調査した。ロシア政府による資金援助の理由としては、農奴主による自主的農奴解放を定めたニコライ一世の1842年の勅令<sup>2</sup>に対するハクストハウゼンの論文が注目されたため、といわれている。ハクストハウゼンの調査旅行は、純粋な学術研究というよりは、来るべき農奴制改革に向けて、ロシア農村の実態を調査する公的な研究だったと考えるにはそれなりの根拠がありそうである。

調査の結果は、上述の『農村諸制度の研究』として、やはりロシア政府の資金援助を受けて1847年に第1巻と第2巻が、1852年に第3巻がフランス語とドイツ語で出版された。しかしながら、ロシア国内での出版は長らく禁じられ、かろうじて1869年に2巻本としてロシア語訳の出版が始まったが、

---

1 Haxthausen, August von, *Studien über die innern Zustände, das Volksleben und insbesondere die ländlichen Einrichtungen Russlands*. Hanover: Hahn, 1847—1852.

2 Указ об обязанных крестьянах .

これも 1842 年に出版された版の最初の 20 章が第 1 巻として出版されたものの、後に続くべき第 2 巻は出版されなかった<sup>3</sup>。

このような理由からか 1847 年に出版された時、この『農村諸制度の研究』はロシア論壇にはほとんど注目されなかったが<sup>4</sup>、農奴制改革についての議論がロシアの論壇で盛んになる 1850 年代後半以降は討論の基礎となる貴重な資料として、特に農村共同体をめぐる議論の基礎資料として注目されるようになった。

他方、『農村諸制度の研究』の中でハクストハウゼンがロシア農村の特徴として注目した農村共同体は、彼がロシアを訪れた 1840 年代のロシアにあっては西欧派とスラヴ派の論争の中心的テーマの一つでもあった。特にスラヴ派はロシア民族の特殊性の証として農村共同体に着目していた。ハクストハウゼンがスラヴ派の影響のもとに農村共同体研究を行った可能性は十分に予想できる。

以下本論では、限られた資料の中からではあるが、まずはスラヴ派の農村共同体論とハクストハウゼンの関係を再構築し、しかる後に 50 年代の共同体論争におけるハクストハウゼンの影響を分析したい。

## I ハクストハウゼンの調査旅行

1843 年 3 月初旬にベルリンを出発したハクストハウゼンは、海路ダンチヒからリガを経由して 4 月中旬にペテルブルクに到着した。その後、しばらくペテルブルクに滞在した後彼は、4 月末に陸路、モスクワに向かって

---

3 Гакстгаузен барон Август . Исследования внутренних отношений народной жизни и в особенности сельских учреждений России . Т . 1 . М . , 1869 .

4 1847 年第 5 巻の『現代人』誌には 2 ページ弱の書評がある。Смесь // Современник . 1847 . Т . 5-2 . С . 247-248 . これに続く第 6 巻には 10 ページにわたる長文の引用を含む紹介文が掲載されている。Отрывки из книги о России , барона Гакстгаузена // Современник . 1847 . Т . 6-1 . С . 38-48 . しかし 10 年後の 1857 年になっても注目されてこなかった。「残念ながら彼の著作は我が国ではあまりに知られていない」。Чернышевский Н.Г. STUDIEN... // Полное собрание сочинений . Т . 4 . М . , 1948 . С . 313 .

出発した<sup>5</sup>。ペテルブルクでの行動は明らかではないが、ロシア国内の移動、および調査に必要なさまざまな行政文書の作成に奔走していたものと思われる。実際、彼はロシア各地を調査する際、皇帝から通訳兼ガイドの若者を提供されたうえ、現地の役人から豊富な情報も得ている。彼の調査旅行は皇帝政府の公的な性格を帯びていたのである。

さて、モスクワへ向かってペテルブルクを発ったハクストハウゼンは、モスクワへの途上で林業試験場を見学するなど、早々に調査を開始している。またロシアの農村社会の特殊性については、途中で立ち寄ったトヴェーリで、当地の国有財産省の役人からロシアの農業共同体の仕組みやアルテリの仕組みについてかなり詳細な説明を受けている。ここで彼は、共同体が「郷 **ВОЛОСТЬ**」の下位に位置づけられた地方行政機関であること、共同体内の選挙で選ばれた長老には国費から給金が出ること、さらに「郷」の長は知事の任命であること、徴兵は共同体の責任であることなど、おもに農村共同体の行政的、国家的性格を説明されている<sup>6</sup>。

その後ハクストハウゼンは5月2日にモスクワに到着し、10日ほど滞在した後、5月12日にヤロスラヴリに向けて出発している<sup>7</sup>。この間、モスクワで主にスラヴ派の知識人からロシアの実情についての情報を得たのだが、ハクストハウゼンに対するスラヴ派の影響については次章で分析する予定なので、ここでは触れずにおく。

モスクワを発ったハクストハウゼンはヤロスラヴリ周辺で農村の実地調査を行う。ここでの調査を踏まえて彼は、共同体の慣習の起源については「各人への平等な割当地の原則は、スラヴの原初的な原則だ」と語り、共同体の利点としては「今に至るまでその国にはプロレタリアートがおらず、そのような共同体の制度が存在する限りプロレタリアートは形成されない」と、プロレタリアート化を防止する効果を上げ、他方欠点としては「毎年の土地の割替えの上には、農業の成功の条件はない」と毎年の土地の割替えが生産力

---

5 *Гакстгаузен . Указ . соч . С . 1 .*

6 *Там же . С . 11-12 .*

7 *Там же . С . 16-45 .*

の桎梏になっている点を挙げている<sup>8</sup>。

ここで注目すべきは、プロレタリアート化を防止するという長所に関連して、ハクストハウゼンがヤロスラヴリでの実地調査の後でロシアの農村共同体と「現代の政治セクト、特にサン・シモン主義と共産主義者の夢」との「注目すべき比較」を行っていることである<sup>9</sup>。ハクストハウゼンの理解ではサン・シモン主義は「土地に対するすべての私有財産権、および土地に対する相続権をその場所に対する一代限りの権利に置き換えることによって、廃止する」<sup>10</sup>。彼は土地に対する私有財産権を否定する点でサン・シモン主義とロシアの農村共同体の慣習に「驚くべき相似性」を見出しているのである。

ただしここでハクストハウゼンは、「サン・シモン主義者がその上に彼らの近代社会を樹立しようとした社会状況」とロシアの社会状況が異なることも指摘している。ロシアの農村共同体は「全く民族的でキリスト教君主制に適合している」と<sup>11</sup>。「他の現代国家においては、貧困化とプロレタリア化は社会の現状が生み出した化膿した傷である」のに対して、「ロシアは他のヨーロッパを脅かしている革命的傾向に全く恐れることはない」、「その健全な内部的組織はロシアを貧困化、そして共産主義や社会主義の教義から守るのだ」<sup>12</sup>。一見、似ているように見えるサン・シモン主義とロシアの農村共同体ではあるが、ハクストハウゼンは自身の保守的な観点からロシアの農村共同体を「共産主義や社会主義」から切り離し、その上で擁護しているのである。

さて、いったんヤロスラヴリを離れて商業都市リュビンスクを視察した後、ハクストハウゼンは5月20日に再びヤロスラヴリに戻りそこでの商工業の状態を調査する<sup>13</sup>。そして彼はヤロスラヴリの定期市に手工業製品を供

---

8 Там же . С . 78-81.

9 Baron von Hazthausen [1856] *The Russian Empire, People, Institutions, and Resources*, Vol. 1, London, p. 132. この部分はロシア語訳では削除されているために英語訳をテキストとして使用する。

10 *Ibid.*

11 *Ibid.*, p. 133.

12 *Ibid.*, p. 135.

13 Гаксткаузен . С . 96.

給する「手工業共同体 *ремесленная община*」に着目する。彼にとってこれは「サン・シモン主義者が夢想しているような工場の、自由な工場協同組合」であった<sup>14</sup>。ここで彼が「手工業共同体」と言っているのは、農村共同体の余剰人口が共同体に籍を残したまま、集団で出稼ぎに出る「アルテリ」と呼ばれる組織のことである。多くの場合、ここでも農村共同体におけるのと同様に、共同所有、平等分配の原則が働いているので、ハクストハウゼンはここにサン・シモン主義との相似点を見ているのである。

一方で彼は、生産力の点からもこの「手工業共同体」を評価している。上述のようにアルテリの構成員は主に農村共同体の余剰人口であるので、これが手工業に従事することは一義的には「農村共同体に大きな利益」をもたらし、さらには気候的には恵まれていないにも関わらずヤロスラヴリ県に「相当な福祉」をもたらす。実際「現在そのような工場が多数存在」し、「そのいくつかは成功している」。したがって、「国家全体の経済に関するなら」「政府はそのあらゆる影響力をこのような民力の適用の保存に使うべきだ」と彼は農村共同体と同様、アルテリをも擁護するのだった<sup>15</sup>。

5月22日にヤロスラヴリを発ったハクストハウゼンは北へ向かい陸路ダニーロフを経由して24日にヴォログダに着く。2日間の調査の後、再び北上した彼は28日に北ドヴィナ川とスホナ川の合流点の港湾都市ヴェリーキー・ウスチュークに到着し、北部ロシアの調査を行う<sup>16</sup>。

ヴェリーキー・ウスチューク周辺で北部ロシアの生活習慣の調査を終えるとハクストハウゼンは南下し、ニコリスク、ユーリエフツツを経て再びニジュニ・ノヴゴロドに戻り、対岸のアルマザスで靴職人の共同体を調査したり宗教的異端派の集落を調査したりしている<sup>17</sup>。その後ハクストハウゼンは、ヴォルガ河を船で下り、17日にカザン着。タタール人の集落を調査し、さらにヴォルガル人、シンビルスクではモルダヴィア人とヴォルガ沿岸の非口

---

14 Там же . С . 109.

15 Там же .

16 Там же . С . 139-158.

17 Там же . С . 158-214.

シア人の集落を調査している<sup>18</sup>。29日に訪問したボリショイ・イルギスでは毎年の土地割り替えを実行していることを確認し、これを「スラヴの原初的な割替」と記録している<sup>19</sup>。彼は、この地方の施肥をしない三圃制農業がこのような割り替えを可能にしていると解釈している。

7月にサラトフに着くとそこでドイツ人入植者がドイツ式農業を行っているのを観察し、その後、陸路でペンザに向かう。ペンザからさらにタンボフ、リベツク、ボロネジ、ハリコフと中央ロシアおよびウクライナの黒土地帯を調査した後、彼はクリミア半島のフェオドシア、ケルチへと調査旅行を続けている<sup>20</sup>。

ケルチからハクストハウゼンは8月1日に海路ザカフカース地方へと渡り、9月22日にはザカフカースの調査を終えてケルチに戻っている。ケルチからフェオドシアと来た道に戻り、ハクストハウゼンはさらに9月24日シンフェローポリ着、9月26日セヴァストーポリ着、そこから騎馬によって黒海沿岸に出て9月30日にはシンフェローポリに戻っている。その後、ヘルソン、ニコラエフスクを経由して10月3日にはオデッサへ。以後はキエフ、オリョールと北上して10月29日にモスクワに到着し、そこで越冬している。ベルリンに向けてペテルブルクを発つのは翌1844年4月のことだった<sup>21</sup>。

## II モスクワのスラヴ派

すでに見てきたように、ハクストハウゼンはその調査旅行の行きと帰り、つごう2回モスクワに滞在し、当地の知識人と交流している。おりしも彼が訪れた1843年から1844年は、モスクワの知識人の世界において西欧派と

---

18 Там же . С . 316-361.

19 Там же . С . 362.

20 Там же . С . 375-490. 1847年に発行された2巻はここで終わっているため、以後の行程は肥前栄一「アウグスト・フォン・ハクストハウゼンのロシア旅行覚書抄」、『ドイツとロシア』、1986年、未来社所収、による。

21 肥前、166頁。

スラヴ派の論争が激化していた時期にあたる。たとえば両派の対立について、1842年7月に流刑先のノヴゴロドからモスクワに帰還したゲルツェン（Александр Иванович Герцен）は、そこで西欧派とスラヴ派の対立が激化し、「二つの陣営が対峙して」論争を展開していた、と回想している<sup>22</sup>。このような論壇状況において西欧派に対してロシアの特殊性を主張するスラヴ派の言説が、ドイツや他の西欧諸国と違うロシアの特殊性を調査しようとするハクストハウゼンの興味を引いたのは、ごく自然なことであった。

そもそもスラヴ派というグループは、1839年から40年にかけての冬のモスクワにおける内輪のサークルで様々な論点で議論を繰り返していた知識人の中から、ホミャコフ（Алексей Степанович Хомяков）の周辺に集まった、キレーエフスキー兄弟（Иван, Пётр Васильевич Киреевский）、コンスタンチン・アクサーコフ（Константин Сергеевич Аксаков）、ヴァルーエフ（Дмитрий Александрович Валуев）といった人々を初期のメンバーとして形成された。後の1850年代の農奴解放論争で活躍するコシェリョーフ（Александр Иванович Кошелёв）、サマーリン（Юрий Фёдорович Самарин）、チェルカッスキー（Владимир Александрович Черкасский）が少し遅れてこのグループに合流し、さらにコンスタンチンの弟、イヴァン・アクサーコフ（Иван Сергеевич Аксаков）がこれに加わった。

思想的には1839年の暮れ、ホミャコフがキレーエフスキーの家で毎週開かれたサロンにおいて<sup>23</sup>、「古きものと新しきものについて」という論文を発表して、後のスラヴ派理論の基礎を築いたのが端緒である。その論文で彼は、他の世界とは異なる「ルーシの地」の原理として、1. 征服ではなく招聘によって成立した「民と仲睦まじい権力」、2. カトリックとは異

22 Герцен А. И. Былое и думы. Собрание сочинений в 30- и томах. М., 1956. Т. 9. С. 152.

23 キレーエフスキー兄弟の母親アヴドーチア・ベトローヴナ・エラーギナ（Авдотья Петровна Елагина）が主催していた文学サロン。「エラーギナ夫人のサロン」として知られている。ゲルツェンの回想によれば毎週日曜日に開かれ、文学や哲学の論争が繰り広げられた。Там же. С. 156.

なる「純粹で啓蒙された教会」<sup>24</sup>、および3. 国家も領主も介入することのできない「農村共同体の話合いの伝統」<sup>25</sup>、4. ロシア史におけるピョートル大帝を画期とする「新しい時代の始まり」<sup>26</sup>といった、後のスラヴ派が議論の根底に据える諸テーゼを提示したのだった。ホミャコフはロシア民族の特徴として、西のカトリックとは異なる東の正教の信仰に着目しており、正教の説く全一性や無私の精神を西洋の個人主義に対置し、そしてその正教精神の具体的な表れとして農村共同体に着目していたのであった。

1842年に領主と農奴との間の「示談 *сделка*」による自主的な農奴解放に道を開く「義務農民に関する勅令」が皇帝ニコライ一世によって発布されると、ホミャコフは、それについて雑誌『モスクワ人』に論文「農村の諸条件について」を発表している。そこで彼は、個人単位での解放に反対し、農村共同体の保持を訴えたのだった。彼によれば、ロシアの農民は個人として独立していない。農民は農村共同体の中で生活しており、その「家族的で、小さいが生きたグループの力」によって国家と結び付けられている。領主との関係も個々の農民ではなく、農村共同体が主体となっている。したがって地主と農奴との間の「示談」も「個々の農民の意思ではなく、農村共同体全体」との間で行われるべきだ、とこの論文で彼は論じたのであった<sup>27</sup>。さらにこの論文でホミャコフは、個人単位で農奴を解放した場合にロシアでも発生するにちがいない賃金労働を批判する文脈で、「ロシアの農民は、西洋のプロレタリアートになったことはないし、なる必要もないし、なつてはならないのである」と力説している<sup>28</sup>。ロシア農民の農村共同体的生活習慣がプロレタリアートの発生を防いでいる、という理解である。

このようにスラヴ派はハクストハウゼンが最初にモスクワを訪れる1843年5月以前に、すでにロシアの民族的特殊性に関する一連の命題を定式化し

24 Хомяков А. С. О старом и новом // Полное собрание сочинений . М., 1900. Т. 3. С. 11.

25 Там же . С. 13.

26 Там же . С. 26.

27 Хомяков . О сельских условиях // Там же . С. 70-71.

28 Там же . С. 70.



ており、その観点から農村共同体に着目していたのであった。そしてその上で、農村共同体の伝統があるが故にロシアは西欧を脅かしているようなプロレタリアートや革命とは無縁だ、と論じていたのであった。

### Ⅲ スラヴ派とハクストハウゼン

本論第1章で見てきた通り1843年5月2日にモスクワに到着する以前、すでにハクストハウゼンは、トヴェーリにおいて現地の国有財産省の役人からロシアの農村共同体についての情報を得ている。その限りでハクストハウゼンは、ロシアの農村共同体をモスクワ・ロシア以降の権力による人為的、行政的なものと理解していたはずである。

ところがすでに述べたように、モスクワを出てヤロスラヴリ周辺で農業共同体の実地調査をした後で彼は「各人への平等な割当地の原則は、スラヴの原初的な原則だ」と述べ<sup>29</sup>、農業共同体を官製の行政組織ではなく、「原初的な」スラヴ民族固有の制度として見ている。また、「そのような共同体が存在する限りプロレタリアートは形成されない」と農村共同体の利点も指摘している<sup>30</sup>。

モスクワ滞在中にも「ロシアの道は他のヨーロッパ諸民族の文明化の道とは全く異なっている」と語り、ピョートル改革の意義を問い<sup>31</sup>、ロシアにブルジョアジーが根付かなかった原因を、それが「ロシア民族の道徳、習慣、世界観に反していた」ことに帰すなど<sup>32</sup>、スラヴ派的な見解を語っている。明らかにスラヴ派の影響によって農村共同体に対する見方を変えているのである。実際彼自身、その「覚書」に1843年5月8日付で記録している。「夕刻、キレーエフスキーを訪問。ロシア民謡を収集している彼の弟ならびに詩人ホミャコフも居合わせた。ロシア教会についての対話。彼らは言う。ロ

---

29 Гакстгаузен . С . 78.

30 Там же . С . 81.

31 Там же . С . 18.

32 Там же . С . 33-34.

シア教会は共同感情である」と<sup>33</sup>。

当時、西欧派の陣営からスラヴ派との論争に参加していたゲルトツェンも、スラヴ派のコンスタンチン・アクサーコフが当時「農村共同体、村会、アルテリミールの宣伝をしていた」と回想し、「彼はそれらのものの価値を理解するようにハクストハウゼンに教えこんだ」と証言している<sup>34</sup>。

さらにゲルトツェンは、ハクストハウゼンがモスクワを後にする5月12日の翌日、5月13日付の日記にハクストハウゼンとの会話の内容を次のように記録している。

私はヤクストハウゼンと話す機会を持った<sup>35</sup>。我が国の農民の生活習慣、領主権力、ゼムスキー警察<sup>36</sup>や行政一般についての明晰な見解に驚かされた。彼は共同体を遠い昔から保存されている重要な要素だとみなしており、まさにそれを時代の要請に応じて発展させるべきだと考えていた。土地付きであろうと土地なしであろうと、個人的な解放を彼は有益とは考えていなかった。

…ところで家内農奴や職人について語りながら、ヤクストハウゼン男爵は「そこには『各人はその才能に応じて』の反対の、サン・シモン主義の原理がある」と語った<sup>37</sup>。

他方、ハクストハウゼンに対する影響については、スラヴ派のメンバー自身からの証言もある。「古典的スラヴ派」の一人コシェリョーフには<sup>38</sup>、ハクストハウゼンについて興味深い指摘がある。それはヨーロッパ旅行中に偶然に知り合った、イタリア統一運動の活動家、カミッロ・カヴールとハクスト

33 肥前、250頁。

34 *Герцен* . Былое и думы . Т . 9 . С . 163 .

35 ここでゲルトツェンは「ハクストハウゼン」ではなく「Якстгаузен」と彼の名前を誤って書いている。

36 1837年に導入された警察制度。

37 *Герцен* . Дневник от 13 мая 1843 г . Т . 2 . С . 281-282 .

38 「古典的スラヴ派」については、大矢温「古典的スラヴ派の言論活動」、札幌大学外国語学部『文化と言語』、2014年、第80号、参照。

ハウゼンとの比較である。彼はカヴールが「理性のみならず心でも」理解したのに対して、ハクストハウゼンは「理性だけで、統計的事実として」しか理解しなかった、と回想している<sup>39</sup>。スラヴ派のコシェリョーフが「ロシアの民族精神と農村共同体の長所」を説き、他方、イタリア民族主義者のカヴールはそれを「よく、生き生きと、完全に理解した」というのである。

またコシェリョーフは、このときカヴールとの間に「ロシアで進行中の農奴の解放とロシアの農村共同体についてのきわめて興味深い会話」が交わされた<sup>40</sup>、とも回想しているが、おそらくここでコシェリョーフはカヴールに農村共同体をロシア民族の特殊性として紹介し、それがプロレタリアート化を防ぐことを説明したものと思われる。これに対してカヴールは、「ロシアには現在ヨーロッパを悩まし、果てしない混乱によってその将来を脅かしている多くの災難から救い出す制度がある」と語って、コシェリョーフの説明に理解を示している。

これに対して、1843年から44年にロシアのモスクワで知己を得たハクストハウゼンについてコシェリョーフは、「我々は最後にはロシアの農村共同体の意味と意義を飲み込ませ」、その後、彼は「ロシアについての著作の中でそれについて素晴らしく記述した」が、「見たところ彼はその制度を理性だけで、統計的事実として理解しただけで、ロシアの偉大な将来の萌芽、証拠とは理解しなかった」と回想している<sup>41</sup>。

この回想録から、1843年にロシアに現れた時、ハクストハウゼンは「ロシアの農村共同体の意味と意義」を理解しておらず、それを「飲み込ませた」のは「我々」、つまりスラヴ派のグループだったことが読み取れる。しかも「理性だけで、統計的事実として」それを理解したハクストハウゼンは、プロレタリアート化を防ぐ、という現実的な効用は理解したものの、民族主義者のカヴールとは異なり、スラヴ派の説くロシアの民族性や民族精神については理解を示さなかったのではないだろうか。

39 *Кошелев А. И.* Записки. Под ред. Цимбаева Н. И. Издательство МГУ. 1991. С. 110.

40 Там же.

41 Там же.

さて、話をモスクワのハクストハウゼンに戻すと、ハクストハウゼンはロシア各地の調査を終えた後、1843年10月末にモスクワに戻り、そこで越冬して翌年4月にペテルブルクからベルリンへの帰途についている。彼の「覚書」からも冬の間ハクストハウゼンがモスクワやペテルブルクでロシアの知識人と交流し、ロシアについての知識を蓄積していた様子がうかがえる。

たとえば1843年11月付の「覚書」には「パヴロフ。ロシア人の共同体の討論においては、多数決ではなく理性が決定を下す」との記述がある<sup>42</sup>。この「パヴロフ」とは当時、ロジュヂェツトヴェンスキー並木道沿いの館でサロンを主宰していたН.Ф. パヴロフ（Николай Филиппович Павлов）と推測される。彼自身はごく早い時期から西欧派に属していたので<sup>43</sup>、農村共同体に関する情報は、彼自身や他の西欧派ではなく、彼のサロンに居合わせたスラヴ派から得たものであろう。この当時はまだ西欧派とスラヴ派が決定的に決裂していなかったため、同時代人の回想にはグラノフスキー、ゲルツェンなどの西欧派と並んで、コンスタンチン・アクサーコフ、ホミャコフ、シェヴィリョーフなどのスラヴ派、そして「プロシアの男爵ハクストハウゼン」の名がこのサロンの「最常連」として挙げられている<sup>44</sup>。

この「プロシアの男爵ハクストハウゼン」にロシアにおける経営の具体的かつ実務的な情報を提供したのは、3000デシャチーナの森が付属した9000デシャチーナの土地に帳簿上3500人の男性農奴を所有する大領主でもあったコシェリョーフであった。ハクストハウゼンの「覚書」にも、1843年12月11日に畜産物価格について<sup>45</sup>、農業経営について<sup>46</sup>、工場経営について<sup>47</sup>、人

---

42 肥前、183頁。

43 コシェリョーフはその『回想』において1835年のこととして、スラヴ派のホミャコフに対する「西洋文明のもっとも一面的な擁護者」としてグラノフスキー、ゲルツェンと並んでパヴロフの名を挙げている。Кошелёв. С. 77-78.

44 Карлгоф Е. А. Воспоминания. Пушкинский дом. Р. III, оп. 1, № 1227, л. 68. Цит. по Летопись жизни и творчества А. И. Герцена. М., 1974 Т. 2. С. 325.

45 肥前、187頁。

46 同書、201頁。

47 同書、204頁。

件費について<sup>48</sup>、とコシェリョーフから得た一連の記録が残されている。また、アクサーコフ（おそらくはコンスタンチン）とキレーエフスキー（おそらくはピョートル）からは民謡や民話など、ロシア人の生活習慣についての民俗学的知識を得ている<sup>49</sup>。

その後、ハクストハウゼンはペテルブルク経由で帰国し、調査旅行の成果は『農村諸制度の研究』として1847年に第1巻と第2巻、1852年に第3巻が発表されている。

#### IV 農奴制改革と共同体論争

すでに述べたように、1847年にこの『農村諸制度の研究』の第1巻と第2巻が発表されたとき、ハクストハウゼンのこの著作はロシア国内でほとんど反響を呼ばなかった。そもそも外国人によるロシア農村の調査、というテーマ自体が当時関心を呼ばなかった。また、この著作が強く帯びたスラヴ派的な色調も、この著作について公開の場で論じることをためらわせる原因となった。というのも、出版の翌年、1848年の「諸国民の春」によってウィーン体制が崩壊する中で、スラヴ派が唱道するロシアの民族主義は多民族が共存するロシアの帝國的秩序に矛盾する危険思想であった。また、スラヴ派が説く国家と民<sup>ゼムリヤ</sup>を対比する論理構造も、国家と社会を対比する自由主義の理論構造を連想させた。ヨーロッパ全体が自由主義と民族主義によって動揺する中で、スラヴ派は「赤ではなく真っ赤、改造者ではなく破壊者」<sup>50</sup>として見られていたのである。実際、1849年3月にはイヴァン・アクサーコフが「自由主義的な」手紙の故に、つづいてサマーリンが沿バルト地域の民族問題を扱った「リガからの手紙」の故に逮捕されている。さらにこれに続く1849年4月にロシア内務省は、スラヴ派に対してロシアの民族衣装を着ること、および顎ひげを蓄えること、つまりロシアの民族主義を煽るようない

48 肥前、213頁。

49 同書、253-282。

50 Кошелёв . С . 97.

たちで公衆の面前に出ることを禁じている。つまりスラヴ派はその「危険思想」のゆえに弾圧の対象となったのであった。スラヴ派の思想と行動が弾圧され、停滞している以上<sup>51</sup>、スラヴ派の影響を強く受けたハクストハウゼンの著作もまた、論壇の表舞台には出られなかったのである。

1855年の新帝アレクサンドル二世の即位と翌年のクリミア戦争の終結は、このような状況を一変させた。即位当初こそ、施政方針が明らかでなかったアレクサンドル二世ではあったが、クリミア戦争の敗戦によってロシアの後進性が明らかになると、大規模な改革が焦眉の課題となった。改革案を民間から調達するためにも、それまで過度に厳格だった検閲が運用面で緩和された。この緩和策の一環としてスラヴ派の雑誌『ロシアの談話』も1856年2月から発行が許可された。ロシアの民族性を謳うこの新しい雑誌の綱領は当時の有力紙『モスクワ報知』に掲載され、広く広告された。ただしこの時、『モスクワ報知』紙の編集者はこの綱領に「学問と芸術は啓蒙的な、したがって全人類的な見解のみを許すのではないか」と注釈をつけてこれを批判している<sup>52</sup>。『ロシアの談話』発行前からはやくも学問と芸術をめぐる西欧派とスラヴ派の論争が再開されたのだった<sup>53</sup>。『モスクワ報知』からの批判に対しては、時を措かずにサマーリンが『ロシアの談話』創刊号に「学問における民族性について一言」を発表して普遍的で全人類的な学問芸術論を展開する西欧派に反論している<sup>54</sup>。これに対して西欧派からは即座にチチュエリン(Борис Николаевич Чичерин)が論文「学問における民族性について」で再反論している<sup>55</sup>。1840年代にモスクワのサロンで展開した西欧派とスラヴ派の論争が「民族性論争」として定期刊行物の紙上で再開したのだった。

ところでこの「民族性論争」とほぼ時を同じくしてチチュエリンは「歴史問題に関して」も、具体的には農村共同体の起源についても問題を提起して

---

51 См. Цимбаев Н. И. Славянофильство. МГУ, 1986. С. 131.

52 Московские ведомости. № 27. 3 марта 1856.

53 См. Чичерин Б. Н. Воспоминания. М., 2010. Т. 1. С. 336.

54 Самарин Ю. Ф. Два слова о народности в науке // Русская беседа. М., 1856. Т. 1. С. 37-41.

55 Чичерин Б. Н. О народность в науке // Русский вестник. 1856. Т. 3. № 9. Май, кн. 1.

いた<sup>56</sup>。

1856年初頭の『ロシア通報』誌に発表した論文「ロシアにおける農村共同体の歴史的発展の概観」において彼は、「ハクストハウゼン男爵の意見は全社会的な尊敬を集めている。したがって、その意見を批判にさらすことは非常に有意義だと思われる」とハクストハウゼンの農村共同体論を批判の俎上に載せたのであった<sup>57</sup>。チチャーリンによれば血縁的共同体は原初的な段階では他の諸民族にもみられた現象であり、スラヴ派やハクストハウゼンが説くようにスラヴ民族の「排他的属性」ではない<sup>58</sup>。しかも現在ロシアに存在する農村共同体は、この原初的な段階における共同体とは異なる原理に基づいている。原初段階の共同体と現在の農村共同体との関係についてチチャーリンは「現在の農村共同体は16世紀末から農民に課せられた身分的義務、徴税と徴兵の割り当てに由来する」「国家的なものである」と主張する<sup>59</sup>。ロシア史を氏族共同体から市民社会を経て国家に至る三段階の発展過程として描き、その中で共同体を位置付けるチチャーリンにとって、原初的な氏族共同体は市民社会段階においていったん解体し、その後、国家によって現在の農村共同体が組織されたので、原初的な氏族共同体は国家段階の、つまり現存の共同体とは別物であった。連続性を説くスラヴ派、およびハクストハウゼンに対しては「断絶説」の立場である。これに対してはスラヴ派からモスクワ大学教授のИ.Д. ベリャーエフ (Иван Дмитриевич Беляев) が再反論するなど<sup>60</sup>、検閲が緩和されたクリミア戦争後のロシアの論壇ではロシア民族の特殊性や農村共同体の性格をめぐる1840年代の西欧派とスラヴらの論争が華々しく再開されたのである。

しかし、このような共同体をめぐる民族性や歴史的起源といった現実生活

---

56 *Он же* . Воспоминания . Т . 1 . С . 337.

57 *Он же* . Обзор исторического развития сельской общины в России // Русский вестник . 1856 . Т . 1 . Кн . 1 . С . 375.

58 Там же . С . 376.

59 Там же . Кн . 2 . С . 600-601.

60 *Беляев И. Д.* . Образ исторического развития сельской общины в России // Русская беседа . 1856 . № 1 . Критика . С . 101.

との接点を欠く古色蒼然とした議論は、大規模な改革を控えたこの時期、明らかに時代の要請に答えていなかった。このような論壇状況の中で、従来の西欧派對スラヴ派という枠組みを超えて、議論を改革に向けた実際的なものに導こうとしたのは、急進的の西欧派と目されていたチェルヌィシェフスキー(Николай Гаврилович Чернышевский)だった。彼は1856年4号の『現代人』誌の雑誌評論欄において、上記の『ロシアの談話』誌と『ロシア通報』誌との間の論争について西欧派の立場から論評し、スラヴ派とは「多くの非常に重要な問題において」見解の相違があることを認めつつも、それらは「抽象的で、それ故にあいまいな問題」であり、改革という「より本質的な志向については全く一致している」と語った<sup>61</sup>。「現実性という確固たる地盤の上で語られ、実際的な問題に言及されるとき、根本的な不一致はあり得ない」<sup>62</sup>、と彼は両派の違いを超えた、改革に向けた現実的な問題を論じるよう呼びかけたのであった。

実際彼は、彼が執筆する『現代人』誌に掲載された論文「ロシアにおける鉄道建設に関する考察」に対して<sup>63</sup>、スラヴ派の『ロシアの談話』誌側からコシエリョーフが「ロシアにおける鉄道建設の利益についての考察」を発表してこれを批判した際<sup>64</sup>、「健全な見解と豊富な知識」の故に、『現代人』ではなくスラヴ派のコシエリョーフの方を高く評価するのも<sup>65</sup>、それが鉄道建設に関する現実的、実際的な議論を行っているためであった。ここでチェルヌィシェフスキーは、西欧派對スラヴ派、あるいは雑誌間の垣根を越えて改革に向けた議論を展開しようとしているのである。

このような立場に立つからこそ、チェルヌィシェフスキーはサマーリンの書評論文「1806年のナポレオンの対プロシア遠征概観」が『ロシアの談話』

61 Чернышевский . Заметка о журналах . Т . 3 . С . 651 .

62 Там же .

63 Журавский Д . Н . Соображение касательно устройства железных дорог в России // Современник . 1856 . Т . 60 . Кн . 2 . С . 108 .

64 Кошелев . Соображение о пользе устройства железных дорог в России // Русская беседа . 1856 . № 1 . С . 156 .

65 Чернышевский . Заметка о журналах . Т . 3 . С . 661 .



誌に発表されたとき、「賞賛以外、何も言うことがない」と絶賛し、「生きた人間すべてに読まれるべき」と推薦したのであった<sup>66</sup>。実際、この書評論文でサマーリンは「あらゆる自治の否定」と「奴隷制の残滓」をプロシア敗戦の原因として分析したのみならず、その分析の「現在への適用」という点、つまり「国家全体が上から下まで改革され、更新された」プロシアの戦後改革の経験を、クリミア戦争敗戦後のロシアの進むべき道として示したのであった<sup>67</sup>。サマーリンにとってもチェルヌイシェフスキーにとっても大規模な改革を控えたこの時期、行政の改革と農奴制の廃止はロシアの国内改革の中心的な課題であったのだ。

ところが当時、農奴制について自由放任経済学者たちは、生産性の観点からこれを廃止し資本主義的生産様式を導入すべきだと主張していた。さらに彼らは『経済指針』誌を中心に、農村共同体についても、これを解体し、西欧諸国と同様に土地に私有財産制を導入すべきだと主張していたのである。これら西欧派「土地なし解放」論者に対してチェルヌイシェフスキーは、サマーリンの書評論文を絶賛した上記の雑誌書評欄において、「西欧における今日の諸国民の生活状況をうらやみすぎてはいけない」<sup>68</sup>、「西欧は決してこの世の天国ではない」<sup>69</sup>と警告を発している。「西欧においては、私有財産制に基づく自由主義経済が弱肉強食の競争社会をもたらし、「プロレタリアート化という潰瘍が広がっている」のだ<sup>70</sup>。西欧において「ほとんどすべての土地が個人の所有に移転するにしたがって、不動産を持たない多数の人々が出現した。このようにしてプロレタリアート化が発生したのだ」<sup>71</sup>。農奴制の廃止に関して現実的実地的な議論を展開するスラヴ派のサマーリンに接近したチェルヌイシェフスキーは、さらに農奴制を廃止するにあたっての土地に

66 Там же . С . 730.

67 Самарин Ю . Ф . Очерк трехнедельного похода Наполеона против Пруссии в 1806 году // Русская беседа . 1857. № 1. Критика . С . 2.

68 Чернышевский . Заметки о журналах . Т . 4. С . 726.

69 Там же . С . 727.

70 Там же . С . 726.

71 Там же . С . 729.

対する私有財産制の導入と自由放任経済の導入、つまり農奴の「土地なし解放」に反対する立場からも論を進めるのであった。

この時、土地の私的所有の原理に対立する原理としてチェルヌイシェフスキーが着目したのが、ロシアの農村共同体に残る共同体的土地利用の慣習だった。チェルヌイシェフスキーの理解では、無制限の資本主義的競争によって農民が農地を失い没落したフランスやイギリスにおいて、悲惨な状況に陥った人々を救済するために「人々の間の連合と兄弟愛の思想」<sup>72</sup>、つまりは「連合」の思想が生まれたのだった。ロバート・オーウェンの思想に代表される初期社会主義思想である。それは農業においては「土地の共同利用への移行」、工業においては「工場の、全労働者の共同財産への移行」となって表れる<sup>73</sup>。しかしこの原理の実現は西欧では極めて困難である。なぜならその実現は「全人民の習慣によって妨げられている」<sup>74</sup>、つまり西欧の人々はあまりに私有財産制度に慣れ親しんでしまっているので、「新しい志向」には移行できない、との理解である。これに対して「土地の個人的所有はまだロシア民族大衆の意識に浸透していない」。ロシアの「人民大衆は今に至るまで土地を共同体の財産として理解している」。共同体が解体して私有財産制に移行した西欧に対して、「ロシア人にはその民族的生活の事実として」共同体的土地利用が存在するのだ<sup>75</sup>。「ある国でユートピアと思われることが、別の国では事実として存在する」<sup>76</sup>。このように述べてチェルヌイシェフスキーは土地の私的所有の原理に対抗する原理として、共同体的土地利用の原理を対置したのであった。

ところで、共同体的土地利用がプロレタリアート化を防止する、という議論自体はすでにハクストハウゼンが『農村諸制度の研究』で指摘した論点であった。すでに見てきたように、初期社会主義との類似性もハクストハウゼ

---

72 Там же . С . 740.

73 Там же .

74 Там же . С . 742.

75 Там же . С . 743.

76 Там же . С . 742.

ンは指摘している。チェルヌイシェフスキーもまた、共同体論を展開するにあたってハクストハウゼンの著作を詳細に分析している。その成果が1857年第7号の『現代人』誌に発表された書評論文「STUDIEN…」である。この論文においてチェルヌイシェフスキーは、ハクストハウゼンの『農村諸制度の研究』を長大な引用を含めて紹介している。10年以上前に出版され、それ以後ロシアではほとんど注目されてこなかったこの著作をあえて取り上げて論じたところに、チェルヌイシェフスキーが共同体擁護の論陣を張るにあたってこの著作を重視していることがうかがえる。

この論文の冒頭でチェルヌイシェフスキーは、「最近の戦争の後、ロシアにとってかつてなかったほど活発な全ヨーロッパの経済活動への参加活動が始まった」と指摘する<sup>77</sup>。「ロシアは経済生産に資本が適用される時代に入った」<sup>78</sup>。彼の理解では、クリミア戦争後、ロシアは全ヨーロッパの資本主義経済に巻き込まれつつあるのだ。しかし自由放任主義者たちは「資本の適用は生産を強化する」と主張して農村共同体を解体しようとしている。他方、「現下の状況では共同体的所有のみが農民大衆をプロレタリアート化から守れる」というのも「疑いのない真実」だ<sup>79</sup>。このようにこの論文においてチェルヌイシェフスキーは、共同体的生産様式と資本主義的生産様式を生産性の比較、およびプロレタリアート化を防止するという共同体的土地利用の長所、この2点を論点として提示するのだった。議論を進めるにあたっては、ハクストハウゼンの著作が豊富な実例を提供した。書評論文の形としてはいるが、チェルヌイシェフスキーはこの論文によって自由放任主義者を論破し、農村共同体擁護の論陣を張ろうとしたのであった。

ハクストハウゼンを紹介するにあたってチェルヌイシェフスキーは、「ハクストハウゼンを知れば、かれが素晴らしい学者であることを否定することは誰もできない」と高く評価している<sup>80</sup>。そのうえでチェルヌイシェフス

---

77 Он же . STUDIEN... Т . 4 . С . 303.

78 Там же . С . 304.

79 Там же . С . 307.

80 Там же . С . 314.

キーは、ハクストハウゼンの著作を引用しながら、私有財産や遺産相続の欠如、共同体内の平等な耕作権と平等な年貢義務、農地の割替、といった農村共同体の慣習の原理を紹介する<sup>81</sup>。そのなかで共同体の短所と長所、つまり生産性の低さという短所とプロレタリアート化の防止という長所をハクストハウゼンの著作からの引用という形で読者に紹介したのであった。

まず、「毎年の耕地割替という共同体的原理には農業の成功の条件は備わっていない」という点<sup>82</sup>、つまり、割替によって翌年には他人の耕作地になる土地には施肥をせず、したがって生産も上がらないという点、については、ロシア農民は「実用的な理解力」を備えており、実際には毎年の割替を行わずに土地を利用している、と指摘した個所をハクストハウゼンの著作から引用してこれに反論している。

また、農民のプロレタリアート化についてハクストハウゼンは、ドイツ、イギリス、フランスの農業を比較してこれを考察している。ハクストハウゼンによればイギリスでは大規模経営によって資本が投下される結果、生産性も高いが、9割の農民は土地を持たず、プロレタリアート化が進んでいる。したがって社会的にも不安定だ。フランスでは土地の商品化が進み農地は細分化されている。経営単位が小さいので土地の改良も進まず、生産性は低い。ドイツはイギリスとフランスの中間的な状況で、都市部ではプロレタリアートが多い。いずれにしろ、どの国でも農民は貧しい。このような社会状況を背景にしてサン・シモン主義が発生した、というのがハクストハウゼンの理解である<sup>83</sup>。すでに本論第1章で見えてきたように、ロシアの共同体とサン・シモン主義との「驚くべき相似性」について彼は、「土地の私有を撲滅し、土地の相続を廃止しようとした」サン・シモン主義が、西欧において「決してその空想は実現しなかった」一方、「ロシアにはそのような事物の秩序が現実に存在している」と指摘している。土地の私的所有の原理によって

---

81 Там же . С . 318-320.

82 Там же . С . 319.

83 Там же . С . 321-325.

プロレタリアートが発生した西欧の革命理論であるサン・シモン主義と「完全に民族的な原理に基づき、君主制原理と一致した」ロシアの共同体とは「全く別の原理」に基づいているのである。「したがってロシアは現在、西欧を脅かしている革命的傾向を少しも恐れないということだ。貧民化、プロレタリアート化、社会主義や共産主義の教説を恐れる必要はないのだ」<sup>84</sup>。ハクストハウゼンはこのように保守的な見地からロシアの農村共同体の利点を指摘していた。

他方、チェルヌイシェフスキーもまた、農民の利益を擁護する立場から農村共同体の意義を認める。「プロレタリアート化という恐ろしい潰瘍を防ぐ共同体的所有原理は有益だ」と<sup>85</sup>。

## むすび

スラヴ派がロシア民族の特殊性として注目した農村共同体の習慣は、ハクストハウゼンによって調査され、その著作は農奴解放に向けた論争において議論の基礎となる貴重な情報を提供した。なかでもチェルヌイシェフスキーは資本主義経済に巻き込まれることによって農民が零落しプロレタリアート化することを危惧する立場から共同体の意義を主張していた。さらに彼は、農地を共有しながらも個別に耕作する、という現状のロシア農村共同体の習慣に伴う低い生産力を克服するために、単に農地を共有するのみならず、農地を共有したうえでこれを共同で耕作する、という「より高い段階の連合」のモデルを示している。このモデルは、所有者と管理者、およびそこでの労働者が同一人物であるような「勤労者の理論」と結び付けられ、協同組合形式の、所有と生産のための組織として提示されるのだった<sup>86</sup>。ここでは勤労者は農地や工場を共有し、経営にも参加する。「連合」によって結びついた

---

84 Там же . С . 325.

85 Там же . С . 331.

86 Он же . Капитал и труд . Т . 7 . С . 5-63.

農民労働者は、個別経営とは比較にならない大規模な経営規模によって資本主義的競争にすら生き残ることができるのだ<sup>87</sup>。ただし、目前の農奴制改革にあたっては、この共同耕作という「より高い段階」への移行は時期尚早だ、というのが彼の現実的な判断だった<sup>88</sup>。「より高い段階」への移行は将来の課題として留保されているのである。

とはいえ、チェルヌイシェフスキーは小説『何をなすべきか』において、2000人以上の人が共同で生活し、大規模な共同作業に携わり、しかもその際、機械の導入によって重労働から解放されている、という一層高い段階の「連合」の在り方を「夢」という形で提示している<sup>89</sup>。

スラヴ派が着目した農村共同体的生活様式という古代からのロシア民族の習慣は、ハクストハウゼンの『農村諸制度の研究』を連結環としてチェルヌイシェフスキーによって社会主義的未来に架橋されたのである。

(令和3年度札幌大学研究助成の成果である)